

幼児にみられる絵本の自発的選択傾向(その2)

神谷圭子

(まるみ幼稚園)

Iはじめに

幼児に何を与えるかについてはおとなに決定権がある。特に絵本の場合はおとなに購買力があり、しかもおとなは子どもにそれを早期に買い与えるために、子どもの自主性は尊重されにくい。

子どもが求める絵本は、子どもが自由に絵本を選択できる場でなければわからない。そこで絵本の貸し出しをしている幼稚園の図書貸し出しカードをもとに子どもが自発的に借り出す絵本の選択傾向を調べた。その結果、同年度異年齢児(S 59年度4, 5歳児)については、4歳児は5歳児以上に科学絵本を借り出す傾向があることがわかった。本調査では子どもが求める絵本の実態を異年度同年齢児(S 59, 60年度4歳児)・異年度異年齢児(S 59年度4歳児, S 60年度5歳児)について調べ、さらにおとなはどんな絵本を与えようとしているのかその実態を把握しようと試みた。

II 調査

<調査1> 子どもの本に対する保育者の意識

(1) 目的 幼児教育には、絵本は不可欠な教材の一つである。保育者向けに絵本指導書が出版され、また保育雑誌の中にも絵本指導の具体例が載っている。そこで、保育現場にいる保育者たちが、どんな意図を持って、どんな絵本を子どもたちに与えているのかその実態をつかもうとした。

(2) 方法 保育者135人に對し、S 61年7月~8月にかけて筆者が質問紙を直接配布し、即日回収した。

<調査2> 子どもの本に対する養育者の意識

(1) 目的 養育者の子どもの本に対する意識が、幼稚園における子どもの絵本の借り出し方に影響を与えるかどうかその実態をつかもうとした。

(2) 方法 S 61年7月に新潟県上越市内で園児に図書貸し出しを実施しているA幼稚園69人、B幼稚園33人、C幼稚園55人の5歳児クラスの養育者165人に對し、担任の教諭から園児を通して質問紙を配布してもらった。回収時には園児の名前と養育者が一致するように担任の教諭に配慮してもらった。また、子どもが幼稚園でどんな絵本を借り出しているのかについて、4歳時期の図書貸し出しカードの分析結果を回収した養育者の回答用紙と照合した。

<調査3> 子どもの自発選択による絵本の傾向

(1) 目的 子どもが自分の意志で自発的に選択する絵本の傾向をつかもうとした。

(2) 方法 子どもの意志だけによる絵本の選択傾向は、子どもに自由に絵本を選択させることによって知ることができる。内容が多様化・多彩化してきた子どもの本をノンフィクション(以下N)とフィクション(以下F)とに分類し、これにしたがって子どもが自発的に選択する絵本の傾向を分析した。

Nは、事実や現実を語る本であり、それを語るための補助的な虚構は認めるおはなしとした。Fは、作者が想像力を働かせて、事件を設定し、人物を想像していくおはなしや昔話とした。

対象児は<調査2>の三園のS 59年度4歳児136人、S 60年度4歳児157人、S 60年度5歳児136人である。

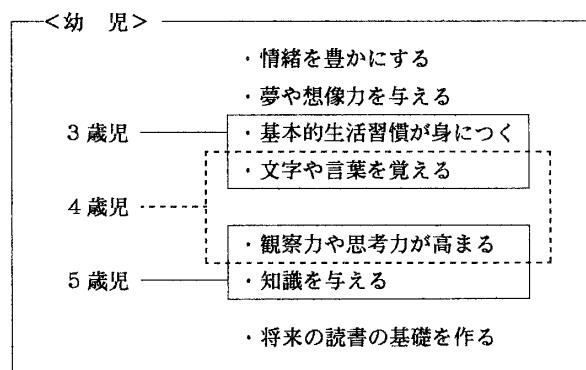
III 結果と考察

科学絵本の読み聞かせは、9割の保育者が経験しており、その対象児は圧倒的に5歳児が多い。それは、保育者が5歳児の発達段階に科学絵本が適していると考えるからであろう。しかし、科学絵本の読み聞かせはどの対象年齢児においてもその反応はよかつたと保育者は回答している。ところが、子どもには是非読み聞かせしたい絵本の書名は、どの年齢児に対してもNをあげた保育者はいなかった。それは、保育者が読み聞かせをする際に留意する点として回答が最も多かった「感情をこめて」「抑揚をつけて」等の配慮がNではしにくいためではないかと考えられる。また、5歳児に読み聞かせしたい絵本が一冊に集中せず、具体的な書名があげられなかつたのは、5歳時期には読書範囲を広げていいろいろな絵本を読み聞かせしたいという保育者の意識の反映といえる。

子どもの絵本の借り出し方は、N志向、F志向、折衷型と様々である。しかし、その志向には関係なく子どもは本好きと養育者はみている。また、家庭で読み聞かせしてもらう頻度は養育者が本好きと思っている子どもほど高い。ほとんどの子どもは、昔話・名作童話といわれる絵本を家庭に持つており、それは保育者や養育者が幼い頃読んだ絵本と一致する。ところが、子どもは、幼稚園からは昔話・名作童話はほとんど借り出さない。その理由の一つとして、子どもはすでにおはなしの内容をよく知っていることが考えられる。

一方、子どもが家庭に持っている絵本には、Nが少ない。それは、8割近くの養育者が子どもの成長に果たす絵本の役割として考えている「夢や想像力を与える」「情緒を豊かにする」ことをNには期待していないのか、あるいは絵本といえばおとなが幼い頃に読んだおはなしのイメージがあって子どもにもそれを買いたいと思うためではないだろうか。

保育者と養育者が絵本に期待する子どもの発達に果たす絵本の役割を<Fig1>と<Table1>にまとめた。

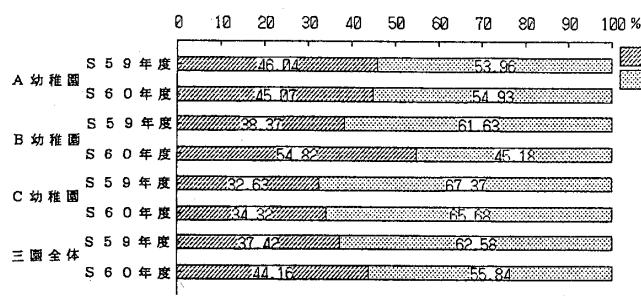


<Fig1 保育者が絵本に期待する子どもの成長に果たす役割>

<Table1 養育者が絵本に期待する子どもの成長に果たす役割>

順位	養育者	
1位	・夢や想像力を与える	(78.8%)
2位	・情緒を豊かにする	(56.4%)
3位	・文字や言葉を覚える	(46.8%)
4位	・観察力や思考力が高まる	(41.0%)
5位	・知識を与える	(30.1%)

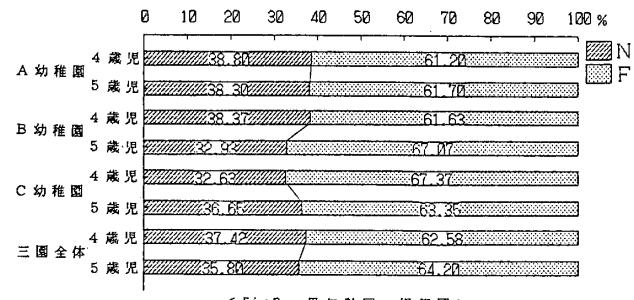
S 59年度、S 60年度とともに各園のNとFの蔵書割合は3:7で同じである。そこで、異年度同年齢児について絵本の選択傾向を分析すると、Nの借り出しについては<Fig2>のようになっている。



<Fig2 同年齢異児集団>

同年齢であっても、集団が異なれば借り出し方に違

いがみられるのだから、同年度異年齢児を比較して借り出し方に違いがみられてもそれを‘年齢の差’とすることはできない。そこで同一集団を4歳時期から5歳時期にかけて継続して追跡した。ここでも、4歳児の方が5歳児よりNを借り出す率が高くなっている。Nを借り出す人数そのものは、5歳児の方が4歳児よりも多い。しかし、5歳児は4歳児より一度に借り出せる絵本の冊数が多くなり、4歳児の貸し出しだけ二学期から始まるなど、単に年間を通したのべ人数だけでは比較できない。そこで、年齢別に全借り出しのべ人数に占めるN借り出しのべ人数を比較すると<Fig3>のように4歳児の方が5歳児よりNを借り出す率が高い。



<Fig3 異年齢同一児集団>

この実態は、子どもがNからFへと読書範囲を広げていくことを示唆している。さらに、子どもが借り出すNは、児童文学学者や心理学者らによって年長児の発達段階にあっているとされる科学絵本が圧倒的に多かった。

本調査では、子どもが借り出す絵本について保育者も養育者も何を借り出したらよいかなどの助言や指示をしておらず、子どもの意志に任せていることが明らかになった。

また、幼稚園の蔵書内からの借り出しという制限はあるが、調査園のある上越市内には、子どもの背丈が届く範囲に、しかも幼稚園の蔵書ほど多くの絵本を常備している書店はない。したがって、幼稚園では書店よりはるかに多くの絵本の中から選択することができる。つまり、ここで選択された絵本は、子どもの絵本の自発的傾向を示すといえよう。

5歳児には、科学絵本がその発達段階にあっていると考える保育者は多い。しかし、子どもに自由に絵本を選択させると4歳児は5歳児以上に科学絵本を借り出す実態がある。自発的に選択している絵本は子どもが求める絵本である。今後、子どもの自発性を生かした絵本の与え方を検討したいと考える。